

千田夏光

終焉の姉妹
下

新日本出版社

終焉の姉妹
下

千田夏光

千田 夏光 (せんだ かこう)

1924年 大連に生まれる

毎日新聞記者を経て、現在、著述業。

主著『從軍慰安婦 (正・続)』『從軍看護婦』『禁じられた戦記』『皇后の股肱』『俘虜になった大本営参謀』『未婚の母』『性的非行』『暴力非行』『皇軍と阿片と謀略』ほか

現住所 東京都江東区亀戸2の6の3の602

終焉の姉妹 下

1980年6月15日 初版

定価 940円

1980年8月30日 第4刷

著者 千田 夏光

発行者 松宮 龍起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-8

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(478) 3311 (代表)

振替番号 東京 3-13681

印刷 享有堂印刷 製本 小泉製本

落丁・盗丁本はおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

終焉の姉妹 下 目 次

ハーフの残飯 5

さようなら 88

父子二代 134

風 雪 209

終焉の姉妹
下

『赤旗』一九七九年五月十六日より一九八〇年一月三十一日まで連載

ハーフの残飯

「こ、こわか、オバちゃん」

「しっかりするとよ、オバさんが手ば握っててあげるからね」

「うん」

「あらあら、こんなに汗ばかいて」

「……………」

「拭いてあげようねえ、ほおら、サッパリしたでしようが」

「……………うん」

「もうすぐ痛みがもつとキツウなるからね、そしたら思いきり“うん”とキバルとよ」

「わかってる」

「まだ痛うならないと？」

「だんだん痛さはおおきくなるみたいだけど、まだそんな……………」

「あんたは、まだ小さかただから、そんなに辛抱せんでもよかとよ、オバさん達ときは“痛い”いうの女の恥といわれたけどね」

「……………うん」

「お腹ばさすってあげようね、もうそろそろ痛みが強うなるころだものね」

「すみません」

「なに言うのとね、お互い女子^{おなご}どうしじゃなかね」

「あっ！」

「痛うなってきたと！」

「オバさん！ 痛か、オバさん痛うなってきたよ、痛かよ！」

「いまよ、いまキバルとよ、うんとキバルとよ！」

「う、うん、わかつてます、これでよかとですか、う、ううん！」

そこで自分で自分がいまなにを口走っているのか、もうわからなくなった。産婆さんが口に割箸みたいな棒をかませたこともあった、が、どこか遠くで「うんうん」うなっている自分のうめきがかすかに渦を巻いているだけなのだった。

どうして、どうして耳から声が聞こえなくなったの、どうしてどうしてなの、繰りかえしているうち、あっ、叫ぶひまもなかった。下腹から、いやお腹のなかの、芯の芯から、熱いかたまりが、どつと、とびだした。

「オギャア」

鼓膜がふるえた。ふるえるなかを全身の力がぬけていく。記憶も、意識もどんどんどこか遠くへ走りさる。ああウチは気を、気を失う。どこかで、

「さ、はやく、むこうの部屋へこの赤ちゃんば連れて行って、見せたら、いけんよ、見せたら……」
「わかつてます」

そんな産婆さんとオバさんの交わしている声がきこえていた。その声で、ずいぶん長いあいだ気を

失っていたと思ったがほんの数秒か、せいぜい数十秒だったのだなとわかった。

眼をあけた。右を見た。仏壇が見えた。オジさんと呼ぶようになった岡田金作が「これがないとどうも家のなかに要石^{かなめいし}がなかようで落ち着かん」敗戦で徴用されていた長崎A兵器製作所を解放されるときすぐカンナとノコギリを持ちだして作った仏壇である。右には「庭に穴ば掘って埋めておいたので助かったとよ」オバさんと呼ぶようになっていた岡田金作の奥さんが嫁にくるとき持ってきたという茶褐色になった桐箆^{桐箆}筒が見えた。佐世保の岡田家の母屋であった。

「オギヤア、オギヤア」泣き声が、その部屋の空気をふるわせているのが、しだいにとりもどす意識のなかでわかった。

昭和二十一年六月十七日、午後七時三十二分。こうして佐藤キヌ子は、あれほど産みたくないと思いつめていた「赤ちゃん」を産んだ。十六歳の夏であった。

とりもどす意識のなかには、もうひとつの思いがあった。男だらうか女だらうか、眼は何色だらうか、ということだった。どっちだらう。ところが、そう思いはじめたキヌ子の耳から「オギヤア、オギヤア」泣き声はしだいに遠ざかるのだった。「よかですね」「はい」かわりに、産婆さんとオバさんの、そんな声がまた聞こえてくるのだった。

とたんに「いけないっ！」キヌ子は起きあがった。「やめて、やめて！ オバさんやめてください！」狂ったように叫んだ。

あのとき、長崎駅で「家出」する先を考えていくうち、キヌ子は結局この佐世保の岡田金作の家をえらぶことにしたのだった。何ヵ月か先の「こと」を考えると知人ひとりいない土地へいく勇氣は出なかったのである。

「可哀そうにやっぱり手遅れだったのね」うなだれながら門前にたったキヌ子のお腹を見ないように

しながら岡田さんのオバさんは、「ここでお産みなさい、私がいいようにしてあげますからね」と言ってくれたのだった。笑顔であつた。それがキヌ子の心をひきたてようとしていつくつた笑顔だったのをキヌ子は知らなかった。知らなかったからこそ今日まで居たのだった。

「あなたのいた部屋ね、あそこもう使っていないとよ、倉庫にしまったの、だから私達の部屋でいっしょに暮らしましょ」自分達が、夫婦が寝起きしている母屋の、二間のうちの一間をあけてくれたのだった。

昭和二十一年といえは戦争中よりむしろ食糧事情はわるく、東京や大阪で餓死者が道ばたにころがっていない日はなかった。主食の米も、その他の主要食品もすべて配給だった。とくに米は「米穀通帳」をもたぬ者には売ってもくれなかった。いや「米穀通帳」があつても米の買えるのは月のうち一週間分がやっとという時代だった。

そんななかで「衝動家出人」であるキヌ子はその「米穀通帳」をもっていなかった。食糧の配給はうけられない「幽霊」だった。それを「心配しないでいいのよ、そんなことは、オバさんがなんとかする」とも言ってくれたのだった。

岡田金作のほうは黙ってうなずいていた。

「なにもしないでいるとかえって気がめいるだろうから、また、古洋服の糸ほぐしでも手伝ってくれかな」黙ってはいしたが、そんな表現で居づらくなるのをかばってくれようとするのだった。配給がないとすればすべてヤミで買わねばならない。米一升百二十円、百三十円する時代にそれがどんなに夫婦の生活を苦しめているか、糸ほぐしをしながらキヌ子にもわかるのだった。

しかしいまは、ひたすら「こうすることが死んだ娘への供養だと思えますよ」「そうだよなあ」キヌ子の耳に入らぬよう、ささやきあっている夫婦の好意にすがるしかないのだった。その半年ちかく

の間、オバさんはキヌ子の「お腹」のことについてただの一度も口にしなかった。それがありがたかったが八ヵ月過ぎもういつ生まれても不思議でなくなったときだった。

「キヌ子ちゃん、生まれたらすぐその「赤ちゃん」は他所にあげようね、あなたまだ十六歳だし育てるのは無理だものね」

とつぜん怖い顔になって口を切ったのだった。そして、

「あげる先はオバさんが親切な人ば探してきてあげるからね。オバさんにまかせるのよ。自分で育てるとなると戸籍に入れなければならんし、そうなると、父親のわからん子は私生児ってなって、学校いくようになると困るようになるからね」そうつけくわえた。

「……………」

このときキヌ子は黙って答えなかった。そんな先のことまで考えるゆとりのなかったこともあったが、それよりなにより、なんとここまできて、お腹に「赤ちゃん」がいて自分がそれを産むという実感がほんとにまだ持てなかったからだだった。六ヵ月すぎるとよく動いた。夜中にピョンピョンお腹の皮を蹴られて眼をなんど覚ましたことか。それでもまだ実感はもてないのだった。

だが、オバさんはそのキヌ子の沈黙を「わかりました、そうします」という了解ととり、知人の産婆さんに「貰い子」先を探してくれるよう頼んでいたのだった。いま「オギヤア、オギヤア」という泣き声が遠ざかっていくのは、そのためなのだった。キヌ子が悲鳴をあげたのもその事を思い出したからだだった。

ところで私（筆者）はこんな話を聞いたことがある。いわゆる母性愛と呼ばれるものについてである。「そもそも母性愛なるものは先天的に女性に備わっているのではなく、子供を産み育てていく過程のなかで生まれてくるものだ」と言う説である。

いささかの疑念がないではないが私にはわからない。なぜなら私は男だからだ。ただつぎのような個人的体験をもっている。私事で恐縮だけど、どうも私は大病院産婦人科の分娩方式というのが好きでない。生まれるとすぐ別室へつれていかれ、親子の初対面はガラス越しというあの方式である。古いのかも知れないが「オギヤア」の産声をきいてホッと一服したところへ「可愛い赤ちゃんです」と「なんて看護婦さんだか助産婦さん（キヌ子のころは産婆さんと言った）だか」「むき身」のをニコニコ顔でつれてきて、いまはどうなっているか知らないけど、生まれてはじめて飲ませるのはガーゼか毛筆にひたした番茶で、何時間かして「さ、お父さん飲ませてあげて下さい」と言う、いご、母子とも同室で退院まで同居という所がすぎである。

そんなことで拙家の豚女は近くのそんなふうなU産婦人科医院で生まれた。下町である。そのときであった。助産婦もかねるU産婦人科医院院長夫人が「パパにそっくり」など、当方をドギマギさせるようなことを言いながら抱いてきた豚女にみせた家内の態度をながめつつ感じたことである。

まず院長夫人がニコニコ扉をあけて豚女を抱きながら入ってきたとき、一瞬ギクツと身がまえたのである。ついで、夫人がU医院のしきたりどおり家内の布団にならべて敷いてある赤ン坊用布団に寝かせるや、こんどは、まるで時限爆弾を見るような眼で、できるだけ遠く、といっても布団の一番むこう端だが、そこまで体をひいて、ただ「眺めて」いるのである。とても、話にきいていた感動の母性愛なんでもでなかった。

彼女が「母親」になつたのは、翌日「オギヤア、オギヤア」泣きはじめた豚女に乳をふくませはじめてからで、いらい彼女の母性愛カーブは急上昇、どうやら半月後あたり、つまり上手にオムツをかえてやれるようになって完成したのであった。これを見ながら「しだいに生まれるもの」という「あの話」はやはり本当なんだなと思ったということである。もともとこれには個人差があるときもいた。

というわけで、この父親の名もわからぬ子、くわえて辱しめのうえにできた子、さらに産まぬための努力を二度までやった子を産んだ直後、それを連れ去られようとするとき「やめて！ オバさんやめて！」と叫んだキヌ子の、その声が、いわゆる母性愛のほとばしりだったかどうか、書いている筆者にもわからない。

ると書いてきたのは、そのわからないことへの説明だったのだが、ここで間違いないのは、この叫んだときのキヌ子の顔が必死であったことである。それまでの「男かな女かな」なんて考えていた顔とまるで違っていたということである。まだ立てない産後の体を、後足のつづれた犬のように「いざらせ」ながら畳をはい、「やめて！ やめて！」オバさんの腰にすがりついたのだ。

「オバさんオバさん、それ、ウチの子よね、ウチの赤ちゃんよね！」

そこまで叫んでいたのである。眼からこぼしていた。ポロポロポロ涙をこぼしていた。オバさんが立ちどまるまですがりついていた。

「キ、キヌ子ちゃん！」

いつかオバさんもキヌ子と抱き合っていた。

産婆さんに「どこか貰ってくれるところ探して下さい」頼んだとき「貰われ先がどこか絶対に詮索しないこと、どこへ連れていっても文句を言わないこと」をオバさんは約束していた。約束はしたものの、それが、どんな所かはオバさんにも想像できた。それだけに悲しかったのであった。

「やめようね、他所へあげるの、やめようね」いっしょに口走っていた。それなら、やめたらどうなるのか。そんなことわかってるのに口走っていた。

キヌ子とオバさんの、その、やりとりを聞いていた産婆さんは、「じゃこれで私は……」うつむきがちに後産のしまつをすませ、汚れものを手早く油紙にくるむとそそくさ帰っていった。やはり泣い

ていた。辛かったのだろう。

夜になった。

「女の子だったってね、どれどれ、可愛い顔して、眼もとがキヌ子ちゃんにそっくりだよ、アババ、バ、バ」

なぜかそれまで顔を見せなかった岡田金作が入ってきたが、ひとしきりそんなことを並べるとすぐ笑顔をかき消しどこかへ立っていった。

ふたたびキヌ子とオバさんだけになった。二人つきりになると、それが合図だったかのようにオバさんはキヌ子の眼を見た。赤ちゃんのほうは見ないようにして見た。赤ちゃんはスヤスヤと眠っている。

眼を見ながらなにか言いかけ、こんどは自分のほうから眼を伏せた。

つい先ほど、キヌ子が赤ちゃんを抱きしめながらトロトロしている間に、夫婦は自分らの部屋で声をひそめ「あれだけ思い詰めているのだから、いっそ養子養孫にしようか」と話しあっていた。しかし「髪が黒い子ならまだしもあんなに茶色で眼まで青いと街の人からあれこれ言われるでしょうし」「お互い気まづくなるのが関の山かも知れないからねえ」とどのつまりの結論は、そこへいったのだった。

当時の日本には、私生児^{ていなしこ}への差別、未解放部落への差別、朝鮮人への差別、まだまだ多くの差別が渦を巻いていた。夫婦が出した「結論」はそんななかで私生児の、それも米兵との混血児をキヌ子ともども引き取ることへの勇気が出なかったということであった。しかし、これらの差別をなくす努力をしてきたのは民主主義とほんとに取り組んできた人達であり、今日は、その努力の結果がみのりつつあるのだが、当時、この夫婦が出した「勇気なき結論」を非難することは少なくとも私（筆者）に

はできない。

夫婦は「しばらく、ようすを見て、そのことを話しましょう」とりあえずそうしたのだった。言おうとしたのはそのことだった。もっとも、その「しばらく」と言うのがどのくらいの期間を指すのか。一週間なのか、十日なのか、それとも新生児の首がすわる三ヵ月のことなのか、いやいや隣近所で「あいのこ」と騒がれはじめたときなのか、これは夫婦にもわかっていなかった。言葉どおり、ただ「とりあえず」なのだったが、実をいうとそれを口にする前にオバさんにはききたいことがあったのだった。

「キヌ子さん、あなた私生児の混血児をかかえ、これからさきいつたいどうやって生きていくつもりなの？」いまひとつ「あのとときどうして『貰い子』に出すのを拒んだの？ 生きていく目安を見つけたの？」言いかけてやめたのは、こちらのほうだった。

やがてキヌ子は、涙を浮かべながらそれを並べるオバさんへ、ポツリポツリ答えはじめた。

「ウチね、とっさに思ったの、あのととき。正直のところ、あのとときまで連れていかれるなら連れていかれてもいいって考えてたんだけど、とっさにね、連れていかれたら、この子、ウチよりもっと可哀そうで辛い目にあうって思ったの。ウチよりもっとヒドイ目にあうのってたまらないものね。ウチが辛いものね。だから『ヤメテ』って言ったの」

「……………」

「これから、赤ちゃんかかえて、どうして生きていくのかはね、まだ考えてない。でもオジさんオバさんに迷惑はもうかけない」

「……………」

「それより、オバさん、ほら、こうして口に指をくわえさすとチュウチュウ吸うとよ、可愛いでし

よ」

「キヌ子ちゃん！」思わずオバさんはそのキヌ子の手を握りしめた。

こうして半月がすぎた。

「ごめん下さい」その半月後だった。たずねてきたのである。父親正吉が。

「キヌ子の父親でございます」座敷に案内された正吉は、岡田さんのオバさんの前へ両手をつき深々と頭を下げた。あの呆けた顔と素振りはどこにもない。別人の佐藤正吉がそこにいた。

「このたびは娘がとんでもない迷惑をおかけして、なんともお恥ずかしいしいでございます。実は数日前、このキヌ子の姉を問いつめましたところ、こちらさまにお世話になっておるのではないかと申しますので、かく、おたずねしたような訳でございます」

口も昔にもどっていた。

キヌ子は、そんな父親を見ながら、「お父ちゃんのあれ芝居ではなかとだろか」姉サトの言ったことを思いだしていたが、やがて「ごゆっくり」気をきかせたオバさんが隣室へ消えるのを見とどけると、正吉はあらためてそのキヌ子へと向きなおった。キヌ子と、キヌ子が頬すり寄せ抱きしめている赤ん坊の顔をこもこも見やりながら、

「二日前のことだった」と口をきった。

その日の夜半過ぎ、夢にうなされ眼をさますと裏庭でコトコトと音がしたのだと言う。なんだろう？ 台所の窓から首をだすとサトの姿が見えた。軒のヒサシの付け根に、母の形見の腰紐をかけているところだったと言う。古い漬物樽を踏み台にしていた。かけ終わると、その紐を首にまわした。

「待たんか！」

自殺するところだとすぐわかった。わかったのと、叫んだのと、とび出したのが同時だった。まさ